

「沈黙」は「美術」

名古屋 覚

セルシ・アンドリュの事は、「文字」や「言葉」をモチーフにしながら、かえって「言葉」がとらえることのできない何かを造形によって確認しようとするものに思える。「言葉はわれわれと事物との間に介在することによって、もののリアリティを覆い隠すのです。私の仕事はこのような言葉の問題を乗り越える試みです」と、彼女はかつて述べている。

アンドリュの仕事は実際、「言葉」の問題を扱って概念的である。しかし、彼女の作品は視覚的魅力をも大いにたたえ、造形的に優れた「美術」作品であり、それゆえに説得力に富むのだということを、強調しておきたい。ここ数年間のアンドリュの仕事、いくつかの主要な作品で振り返ってみよう――

90年の「Heures（定時課）」。「実存」について書かれた6冊の本をアンドリュが読み、読むそばから文字を白い修正液で消してゆく。すべてを読み終え、消し終えた後、ギャラリーにそれらの本を半円形に並べ、それぞれの前に、鑑賞者がひざを突いて文字を消された本を見るための黒い板を置いた。本と対応する位置の壁には「読みながら消す作業が日課として行なわれたことを示す」6つの時計。

92年の「Umu（有無）」。「般若心経」を読みながら、やはりその文字を一字一字、修正液で消す。同じことを1,000枚のコピーで行なった。祈りか修行のようだ。文字を消された「般若心経」を折り畳み、1枚ずつガラスのコップに入れ、上から白い消石灰を詰める。その真っ白なコップを、ギャラリーの床に整然と並べた。

94年の「20×20×400」。市販の400字詰め原稿用紙の1マス1マスを、修正液で塗りつぶす。400枚の原稿用紙に同じ作業をする。その400枚を板に張り、壁に並べて、大きな“原稿用紙”をつくった。ここでは原稿用紙は意味のある「言葉」のための場ではなく、無言の、白く美しいグリッド（格子状のかたち）にすぎない。また、400個のマス目に400枚の用紙といった自己増殖的の反復が、「言葉」なき世界の無限の広がりを暗示する。

95年の「No.0～No.7」。富山県山間部の古い民家とその周辺で実施された「野積記」と呼ばれるグループ展の参加作品。活字用のケースの溝を、活字の代わりに消石灰で埋める。そして“文化の空間”である民家の部屋中央から“自然”に面した窓に向けて、ケースを階段状に積み重ねた。窓に近づくほどに、活字のポイント数「0」から「7」に応じてケースの白い溝は細かく不分明になり、「文字」や「言葉」が自然の光の中で消滅してゆくさまを暗示する。翌96年の「野積記」で発表した「空の文字」では、草地に青いビニールシートを細長く切って並べ、自然の中の“原稿用紙”をつくった。通常何かを隠すのに用いられるビニールシートは、ここでは「もののリアリティを隠す言葉」の隠喩でもある。

“文字を消す”行為について、「言葉をなくしたいわけではない。ただ、言葉の影響はとても大きい。言葉から少し離れることによって、ものの見かたを変えられるのではないかと」アンドリュは説明する。いわば、「言葉」の外側でのみ可能な、認識や存在についての奥深い思索を、彼女は作品化するのだ。

今展では、高さと同幅が90センチ、長さが9メートルを超える奇妙な“書見台”が展示の中心である。台の上面には、字面をつぶされた無数の活字が並べられている。アンドリュが98年中、ハンマーでたたいて“文字を消した”ものだ。壁には活字ケースを、壁に対してやや角度をつけて並べている。活字を入れるべきケースの溝には、白いガーゼ。「清める」行為の象徴だという。3種類のケースが、それぞれ4つ、5つ、6つずつ並べられているが、その数はケースの溝の列の数と一致する――ここにも、彼女のこれまでの作品にしばしば見られた“反復”がある。「書見台は世界のシンボルのひとつ」とアンドリュは言う。このギャラリーの大きな窓からの自然光で、つぶされゆがんだ「言葉の元」、活字がつくる亀裂だらけの“世界の表面”は、さまざまな表情を見せることだろう。

アンドリュの関心が、彼女のいう「言葉が生まれる以前の沈黙」にあるならば、おそらくその「沈黙」こそ、言葉がしばしば隠す「もののリアリティ」に近づく手段であり、言い換えれば造形による「美術」である。97年の作品「Craie in Gen '97」は、黒板に「言葉が出てくる前触れ」として2つに割ったチョークを多数埋め込んだものだが、それを指して彼女が述べた「静謐でありながら暗示に富む、文字になる前の言葉の創始」とはそのまま、本質的な美術のたとえではないか。

アンドリュのほとんどの作品を律するのが、禁欲的なモノクローム、グリッド、法則的な反復性。ミニマルに洗練された造形を通して人間の文化の根元的な問題を掘り下げる、魅力的な概念「美術」である。昨今、「ジェンダー」や「異文化」など表層的な社会問題を声高に訴える一方、造形の魅力を置き去りにした“美術”が、かまびすしい。そんななか、アンドリュの研ぎ澄まされた作品はますます、その凜とした存在感を際立たせるのである。

(なごや さとる・美術ジャーナリスト)